
If... =I succeed the will=

びえろ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

If . . . " I s u c c e e d t h e w i l l "

【Nコード】

N 4 3 4 0 V

【作者名】

びえろ

【あらすじ】

これは有り得たかもしれない1つの物語の軌跡…。

ほむら主人公の再構成もの。正確にはメガほむIFもの。
ワルプルギスの夜に挑み、親友を失った彼女は正史ではやり直しを願った。

だがここはもしもの世界。正史とは異なる選択を選んだほむらの物語です。予定としては中編程度で終わろうかと思っています。

01: Prologue

それは、ほんの小さな可能性。

もしも、それはもしもと呼ばれる世界。

その選択は幸運か、はたまた不幸か。

意味はあるのか。無いのか。それすらも、ただわからない。

選んだこの道を後悔するかもしれない。

もしかしたらもつと別の道があったんじゃないかと思う事もある。

それでも、選んだこの道を引き返す事はない。

ただ、進んでいくだろう。選んだ以上、それが、私の祈りであり、願いだから。

—— 契約は成立だ。さあ、解きはなつてごらん…… ——

If . . . " I s u c c e e d t h e w i l l "

息を吸う。

肺を満たしていく空気。深く、ゆっくりと静かに吐き出した吐息

と共に閉じていた瞳を開く。

黒髪が揺れる。髪型は三つ編みを2つ。三つ編みを結ぶのは赤いリボン。身に纏うのは白と黒を基調とした衣装だ。ゆっくりと、彼女は立ち上がる。

眼鏡の奥の瞳は真っ直ぐ前だけを見据えている。広がる視界はぼろぼろの町並みだった。かつて自然災害に襲われたその町並み。一度は水没し、嵐によって襲われた街はまだその傷跡を深く残している。所々に見える工事の光景。それを眺めながら少女は再び息を吸う。

そのまま、無言のまま、少女は背を向けた。工事の為に照らされた明るい光に背を向けて闇に溶け込むように…。

* * *

「はあ、はあ、はあ——っ！」

息を荒くしながら走る。仕事帰りのフリーターの女性。何度も足をもつれさせ、転びそうになりながらも必死に女性は走っている。それはまるで逃げるかのようにだ。

いいや。実際、彼女は逃げているのだ。何故か？ それは恐怖から逃れる為だ。では彼女が恐れる恐怖とは何なのか？

彼女がいる世界、それこそが彼女の恐怖の原因だ。そこはまるで幻想的な世界だ。蝶が舞い、花が咲き乱れる。そう、それはれはどす黒いグロテスクな蝶が舞い、それはそれは毒々しい色の花が咲き乱れている。

まず、この時点で現実にはあり得ない。彼女が住まうのは都会の中だ。普通の花畑もないのにこんな不気味でグロテスクな世界にいる筈がないのだ。

そんな不可思議な現象に陥り、戸惑っている女性に対して、蝶はまるで獲物を見つけた、と言うように女性を追い立て始めたのだ。女性は当然ながら逃げた。それはそうだろう。自分の頭ほどもあるグロテスクの蝶が襲いかかってきたら虫が苦手でない女性でも逃げるだろう。

だから彼女は逃げていた。だが、彼女の恐怖はそれだけに終わらない。彼女は逃げる先に何かがあるのを見たのだ。それは見上げる程の高さがあつた。それ程までに巨大な影だ。一見してみればそれは樹のようにも見えた事だろう。

だがしかし、それは花だ。樹に間違えるような太い茎に、枝を広げて多い茂るかのような葉と花弁。だが、それがまるで意志を持っているかのように蠢いているのだ。

「ヒィ——ッ！?!？」

思わず足を止める。見るからにおぞましい花卉の色、その姿、恐怖で体が竦んでしまった女性はその場に尻餅を付いてしまう。

そこで女性は思い出すのだ。最近、彼女が住まう街——見滝原——では次々と怪現象が起きているという事を。

その切欠は突如発生した異常気象、それによって見滝原が壊滅的な被害を受けたのがおよそ2ヶ月前の話だ。原因不明の異常気象

によつてぼろぼろにされた見滝原。残された者たちは復興を始めた
り、疎開したりなどの動きが見られた。

それからだ。見滝原に不可思議な現象が多発するようになったの
は。

曰く、怪物が現れて人を襲いだしたと。

まるで笑い話のような話だったが、その噂を真実だとしてしまう
ように年失踪事件が相次ぐようになったのだ。

そんな中、怪物から命からがら逃げ出したと語る者たちの中で、
自分は魔法少女に助けられたのだ、と言う者がいた。頭がおかしく
なってしまったんじゃないか、と噂も立っている。実際にそういう
話は怪物の話よりは知られてはいない。

だが、実際、年頃の少女が行方不明になつていてという話しもよ
く上がっているのだ。怪物に襲われたのか、それとも被害者が見た
いう”魔法少女”が何か関係性があるんじゃないか、と笑い話をし
ていた事もつい先日のこと。

「ッ！？ キヤアアアッ！？」

動かない女性を絡め取るように地中より根が伸びてくる。咄嗟の
事だった為、女性はただ根の為すがままに囚われの身となる。

まるで供物を捧げるかのように天高く女性は根によって運ばれて
いく。地は遠く、叩きつけられれば死ねるだろう高度まで上げられた
彼女は想像した墜落死よりも恐怖を感じる光景を見てしまった。

巨大な花には口があったのだ。まるで獣のような牙が丸い口を開
いているではないか。その奥は暗く、まるで涎のように粘性の液体
が見える。女性は根によって運ばれていく。それが何を意味するの
かわかった女性は嫌悪感と死の恐怖から身をよじった。

死にたくない、ただその一心で彼女は叫ぶ。誰でもいいから、こ

の状況から自分を救い出して欲しいと。助けて、と。

——そして空中でいきなり自身を持ち上げていた根の力が緩んだ。

理由はわからない。ただ、落下していく。このままでは墜落死する。だけど、あんな不気味な奴に食われるよりはマシかな、とそんな事さえ考えてしまう。

そして迫る地面、それを追うようにはらばらになった根が落ちていく。ばらばら？ と女性はその根を見て疑問に思い、そして何かに受け止められた事に驚きを隠せなかった。

「…もう、大丈夫です」

声が聞こえた。誰の声かわからない。ただ何故だろう。ああ、私は助かったんだ、と思ってしまったのは。そして続いていた緊張が途切れたのと同時に力が抜けた女性はそのまま意識を失った。

* * *

ほっ、と一息を吐く。間に合った、と安堵の吐息だ。抱きかかえた女性を横たえる。気を失っている事から、緊張から解放された安堵感の為だろう、と判断する。

そのまま女性に向けて手を翳す。すると女性の周りに光の輪が浮かび上がる。よし、とそれを確認してから立ち上がる。

「やらせない。約束だから」

そして、見据える。巨大なその花の形をした怪物を。

——”魔女”。

心の中で小さく、その怪物を見つめながら足に力を込める。

「それが、私の誓いだから」

*
*
*

”魔女をやっつければそれだけ大勢の人が助かる訳だし…やり甲斐はあるかな！”

今でも、鮮明に思いだせるその言葉。 ”魔女” と呼ばれる人に害為す存在を打ち倒す者である彼女はそう言って笑うのだ。

”今でも自慢なの。あの時…あなたを救えた事。わたし、魔法少女になって本当に良かったってそう思ってるんだ”

今でも、鮮明に思い出せるその笑顔。

何故、と問うた事は何度でもある。今でも問っている。答えは出ない。

何故、と悔いた事は何度でもある。今でも悔いている。許す事はない。

何故、と。何故と繰り返し問い続け、何故と繰り返し悔い続ける。理解も出来ないまま消えて締まった彼女。理不尽のままに死んでしまった彼女。

大好きだった。憧れだった。自分なんかとは違うその真っ直ぐな姿に憧れた。

誰かを助ける事に生き甲斐を感じて、それを嘘偽りなく笑顔のまに果たし続けた彼女を。

今でも焼き付いている。その姿も、その声も。いつだって忘れない。いつでも覚えている。

” さようなら、ほむらちゃん ”

私は、忘れない。

* * *

… やり直しを願う事も出来ただろう。きっと彼女ならその願いを叶える事も出来ただろう。そう願うだろう、とてつきりそうだと思っていた。

「てつきり、僕はそう思ったんだけどな」

感情とはいったって不確定な要素だ。傾向からして「こうなるだろう」と予測はする事は出来るが、確定する事は出来ない不確定要素だ。その感情から得られるエネルギーを回収する為に飛び回っている彼からすればそれは本当に不思議なものでしかない。

今、彼の目の前で戦っている少女の願いの切欠を思い出す。歴史上最大と言われても過言ではないだろう超弩級の”魔女”の戦いから生還した少女。

生還とは言っても、当時の彼女は戦う者ではなかった。ただの傍観者であった。その中で彼女は二人の友人を失っている。魔女と戦う為に契約を交わし、願いを叶えた者たち。それは”魔法少女”と呼ばれる。

まさか二人の魔法少女で撃退出来るとは思っていなかった。確かに二人は素質もあった。片方はベテランでもあった。だがそれでも快挙だったのだ。彼からすればそれは偽りなき本心であった。

だから二人の素質のある魔法少女が死んでしまった、というのは彼にとっては致し方ない事だった。それは、本当にどうしようもない事だったのだ。

だから、彼は自分の役割をこなす。その二人の少女を失い、呆然とする彼女に声をかけたのだ。彼女たちを失っていた事から、彼女は二人を取り戻す為、等とそいつた願いを叶えるのだと思っていた。

悲しみ、という名の感情に満ちていた彼女を高確率でその願いを叶えると思っていた。だが、彼女はその願いを叶えなかった。彼の推測を裏切り、彼女が願ったのは――。

* * *

酷い喪失感だった。
酷い無力感だった。

絶望、と人は呼ぶのだろう。

私は絶望していたのだ。

道標のように輝き続けていた彼女を失った時から。

彼女は私を救えて良かった、というのだ。

助けられて良かった、と。それが私の自慢なのだと。

どうして自分だったんだろう。どうして自分なんか救って良かったって言うんだろう。

生きていて欲しかった。自分の命をあげて生き返るならそうしても良いと思ひもした。

けれど、彼女は笑っていた。…笑っていた彼女は本当に可愛くて、綺麗で、尊敬していた。

——君はその祈りの為に魂を懸けられるかい？

だから、その問いかけを受けた時、真っ先に思ったは何だったんだろう。

彼女を救いたい。救うためにはどうしたら良いだろう？ 自分も魔法少女になって一緒に戦えば良かったのだろうか。

…色々考えた。考えて、考えて、やり直しを望む事も考えた。だけど、その度に彼女の笑顔が浮かぶのだ。

…やり直して良いのか。不意にそんな考えが脳裏に過ぎった。やり直せるならやり直したい。あの出会いをもう一度。そして今度は自分も一緒に。

そしたら、彼女は笑ってくれるだろうか？ …わからなかった。もう一度、もう一度とは望むけれど、でも、それは本当に良いんだろうか？ と考えてしまった。

ゆっくりと、ゆっくりと自分の思いを確かめていく為に思い出しでいく。やっぱり彼女が浮かぶ。もう一度会いたい。会いたいけど、

会ってどうしたいんだろう？ わからない。

彼女なら、——まどかなら、何を望むだろう？ 私に、何を。

”あなたの友達になれて良かった”

こんな私の？

どうして、良かったの？

わからない。ああ、やっぱりわからない。わからないよ、と何度も嘆く。

”だったらさ、格好良くなっちゃえばいいんだよ！”

不意に、思い出した。

なればいい。格好良くなれば良い。どうしたら良いかわからない。けれど、それが彼女が残した道標。

また会いたい。けれど、会ってどうしたいんだろう。彼女を護りたい？ 護りたいけど、どんな私だったら彼女を護れたんだろうか？ 想像する。想像していく。格好良い自分って何だろう。格好良さって何だろう？ 想像して、想像して、ああ、やっぱりそこに浮かぶのは彼女の姿だ。

「……私は……、私は、魔法少女になりたい。”まどか”のような魔法少女に、誰かを護る魔法少女になりたい！！ その為の力が欲しい——ッ！！！！」

そして、私は祈った。そして同時に誓った。私は——彼女の遺志を継ぐ、と。

* * *

その手に握るのは漆黒の弓。その弓に魔力で作った矢を添え、解き放つ。迫った根を穿ち、根から根に飛び移って疾走する。

満ちる魔力は身体中に満ち溢れていく。まるでサーカスのように根から根を蹴って飛び回る。空中で身を捻るようにしながら弓を構え、解き放つ。

「——フウッ!」

息を吸い込み、吐き出すと同時に根を強く蹴りつける。上へ、上へと上っていくように根を蹴りながら駆け上がっていく。その度に髪が揺れる。その髪の上に結びつけた形見のリボンが目に入って僅かに小さく微笑む。

——ああ、大丈夫だよ。

そして全力で屈んでからの跳躍、高く、高く天へと上りながら弓を構える。通常の矢よりも圧縮した矢を構える。

「誓いは、此処に」

手につけたソウルジェムの輝きが増していく。それに呼応するように矢につき込んだ魔力が震え、周囲にその存在感を撒き散らす。

「願いは、此処に」

言葉を紡ぐ。それは己への宣誓にして、世界に告げる誓約。

「私は、護る者」

引いた弓は限界にまで力を込められている為か、その穂先がぶれそうになる。それを1つに集束していく。

「私は、魔女を穿つ者——！！」

そう、私は――魔法少女だから！！

「――消えなさいッ！！！！」

私の祈りを込めて解き放たれた矢は花の形をしていた巨大な魔女の身体を撃ち抜いた。

* * *

「…う、うん…？」

「あ、気がつきましたか？」

「…あれ？ 私…」

目を覚ました女性は軽く頭を振る。そこにいたのは黒髪を三つ編みにした、どこか地味な印象を受ける少女だった。彼女は心配げに女性の肩を揺らしていた。

「大丈夫ですか？ 道端で倒れられていたようでしたので…」

「……そう、なの？ ……あれ…？ ……なんか、私…」

「…悪い夢でも見てましたか？ 凄く魘されてみたいですけども」
「…夢？ 夢、だったのかしら…。あ、貴方、ごめんなさい、なんか迷惑かけちゃったみたいで」

「いえ、気分が優れないようでしたら救急車を呼びますか？」

「うーん、何ともないし、ちゃんと帰れそうだから大丈夫よ。お嬢ちゃんこそ、もう真っ暗だけど大丈夫？」

「あ、私の事は気にしないでください。大丈夫なら、私もそれで良いんですけど」

よいしょ、と立ち上がって少女は服をはたきながらにつこりと微笑んだ。地味な印象は受けるが、笑うと可愛い子だなあ、と女性はあるながら笑みを返した。

「本当、ごめんねえ。なんか御礼してあげたいけど…」

「あ、そんな、全然良いですよ。私も通りかかっただけですから」

「そっか…。本当にありがとうね。お嬢ちゃん、名前は？」

名を問われた少女は、笑みを浮かべたまま答えた。

「曉美ほむら、です」

「ほむらちゃん、か。格好良い名前だね。…あ、女の子に失礼か」

「いえ、良いですよ。好きですから、この名前。——大切な友達に褒められた名前ですから」

* * *

去っていく女性の背を見送りながら、ほむらはふう、と吐息を吐き出した。手に握ったのはグリーンフシードと呼ばれる先程の怪物の”魔女”の卵だ。それに紫色に輝く宝石を近づける。

濁りを帯びていた宝石は濁りを失い、輝きを取り戻す。逆にグリーンフシードは黒く染まり、嫌な気配を帯びている。それを懐にしまいながら、ほむらはふう、と吐息を吐き出した。

「…まどか、私、頑張ってるよ」

そつと髪を留めていたリボンに触れ、ほむらは小さく呟いた後、家への帰宅路を歩み始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4340v/>

If... =I succeed the will=

2011年10月8日13時23分発行